いのちと健康を守る活動

母子のいのちを守るためのチャレンジ「助産所開設」

― 待望の赤ちゃん第１号報告が届きました！ ―

7 月 23 日の保健省認可通知で、助産所は正式に出産介助ができるようになり、8 月 7 日、有資格助産師サルバシオンさんが 2100g の赤ちゃんを無事取り上げました。女の子です。母親は、妊婦高血圧症候群の症状があり、自宅出産は危険な状態でした。お金がないため、他の病院で断られたケースです。

6 日後の 8 月 10 日にも、トゥヤン村の母親が女児を出産しました。

9 月には、双子の赤ちゃんを取り上げました。母親は妊婦検診を受けたことがなく、出産介助中に双子と分かり大慌てでした。未熟児で危険な状態と判断して、近隣の提携病院に搬送しましたが、残念ながら男の子は助けることができませんでした。女の子は元気に育っています。

10 月に入って、ようやくフィリピン医療保険の適用助産所の認可が下りました。医療保険に加入している母親の出産介助により、保険から医療費が支払われるようになります。(PIHS の 8－10 月分メール報告より抜粋)

＊　＊　＊　＊　＊　＊

医療保険加入者は月額 200 ペッの保険料支払いが必要です。支払い困難な貧困世帯には保険料免除の措置もあります。但し、この手続きを知らない住民も多く、かつて会報でご報告のように、CMIP の助産師だったジョジョさんも、山岳部のビラーンやチボリの村で、保険料免除手続きに関する研修やサポートに多くの時間を割いていました。

モロやビラーン等に多い自宅出産のリスクを減らすための助産所開設ですが、目的達成の前提は、医療保険からの支払いで、助産師や医薬品経費が賄えることです。次号では運営面での成果をお伝えできればと思います。

産婦、助産師とともに、認可助産所として初めての赤ちゃん誕生に喜ぶナプサさん

提携病院に搬送され、新生児室で治療を受ける双子の赤ちゃん

高熱の男児のサポートも

助産所の「24 時間患者受け入れ」の看板と、「払えるだけで OK」募金箱は、先住民族だけでなく、近隣の貧困世帯の駆け込み医療センターにもなっていて、9 月 16 日の夜半には高熱を出した男児が運ばれてきました。デング熱を疑いましたが、膀胱炎と分かり薬を処方、翌日帰宅できました。

健康な村作りにとりくむ「保健ボランティア」応援プロジェクト

― ヤギ飼育事業 ―

会員のお一人から、PIHS の資金づくりにヤギ飼育の提案とともにご寄付をいただきました。ヤギで助産師の給与を生み出すのは容易ではありませんが、無償で働く各地域の保健ボランティアの活動資金には最適な事業と、PIHS では早速準備を進めました。

すでに実施地区と飼育係に保健ボランティアが手当を出し合うことも決定。次号の詳細報告お待ち下さい。

日本のリサイクル車いすをあと６台届けていただけませんか！

助産所を訪れる患者には肢体不自由児も多く、再度車いすの支援要請が届きました

今回要請のあった 19 歳の脳性麻痺の青年。野菜売りで生計を立てる母親との二人暮らしです。

PIHS からの要請に応えて、(公財) 日本社会福祉弘済会による「空飛ぶ車いす支援事業（アジアの障害者への車いす修繕寄贈)」に、ご協力をお願いしました。工業高校生により、古い車いすを分解、整備、再生し、アジアで車いすを必要な人たちにプレゼントするという支援事業です。旅行者などが運ぶことから「空飛ぶ車いす」とも呼ばれています。

現在、６家族が待っていますが、緊急性のある２家族のため、手続きを進めさせていただいています。

４月のアガさん訪問時に届けた２台の車いす受益者と助産所スタッフ